
白い銀河に謎の宇宙

あゆみかん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

白い銀河に謎の宇宙

【Nコード】

N4046C

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

7部作。7月7日、七夕が近づく。事の始まりは親の一言からだった。今年の七夕は僕にとって運命を変える出来事となる……

【SF/コメディ/7部作・続投別編あり（読了約29分）】

第1話（前書き）

まずは こんな感じで。
どうぞ。

第1話

白い銀河、って聞いた事があるだろうか？

……知るはずがない。僕が勝手に想像で出た言葉だから。

何で「白」なんだろう？ ……それは、後に明かされる事になる。

「守生^{モシオ}。ちよつとそこに座りなさい」

僕の母が急に真面目な顔で そう言ってきた。顔は真面目なのだが、長い菜箸を持って その先で八工を しつかりと つかんでいる。どうやら今の収穫物らしい。誤解しなくてもらいたいが、別に食べる訳ではない。もちろん、これからゴミ箱にポイだ。

僕は母が急に真面目な顔で来たもので、少しドキツとした。「…はい」僕は居間でTVを観ていた訳で、元々座っていたのだが、母の方に向き直して正座した。一体何なんだ？

母は先に八工を片付けて、改めて僕の前に座った。すると、父も やつて来た。

今日は日曜なので、父は家に居る。父と母、二人して僕と同じく正座。……何なのだろう？ これから座禅大会でも開いて一緒に悟りを開こうよっ ……と もしも言われても。

興味ありません。

すると、父から話を切り出した。「もうすぐ7月7日。七夕だな、守生」

「……はあ。そうだね」

「願い事は あるのか？」

「いっ……。急に聞かれても。そりゃ、色々と。僕だって、もう中

2だし」

「ギターは買ってやらんぞ。ミュージシャンになる夢には反対だ。そう現実には甘くない」

……一体いつ誰がギターが欲しいなんて言いました？ 音楽にも別に興味ないし。

「まあいい。それより……お前に、真実を伝えなければならぬ時が来たようだ」

「……真実って？」

まさか お前は俺の子じゃないなんて言うんでないだろうな？
この親たちは。

「実は お前は ミルキーウェイ星 人 だったんだ」

……。

……。

……… 事実は、予想よりも奇なり。

《第2話へ続く》

第2話

天の川＝ミルキーウェイ。その言われは、どうか お調べください。今の僕の頭の中には、白い……乳の川が流れています。

……僕が、ミルキーウェイ星人？

ははははは！ 冗談は、二度までに してください。仏の顔も、何とやら。

僕が全然変わらない顔をしていると、母が父の後押しをした。「嘘じゃないのよ？ 守生ちゃん」

はい。冗談二回目。次は怒る。

僕が どうやらポカンとしていると、父は重いタメ息をついた。「とりあえず言うだけは言っておく。これまでのイキサツを簡単に信じる信じないは ひとまず後だ。いくぞ？」

……いくぞ、って……………。
どござ。

「そのこの近所の背犬川^{セイヌ}。父さんと母さんが新婚ラブラブ真っ最中で盛りが真っ盛りだった頃、川の中からあるミルキーウェイ星人（以降、ミルキー星人）が出現した。どうやら、空の宇宙船から落ちたらしい。赤子と ともに。その赤子が お前だ。どうやらミルキー星人の星では、宇宙戦争か何かが起こっているのだろう。たぶん。とにかく、その赤子を預かってくれと頼まれた。その顔は真剣だった。すぐ迎えに来るだろうと思っていた……。」

……あれから14年。……長いんじゃないっ！っ！」

……父、いきなりミルキー星人にツッコむ。

「オホン。……で、昨日だ。会社に、連絡が入った」

「えっ、何のっ!？」

「七夕の夜。お前を迎えに行くと。お前の本当の「ご両親……ミルキー星人からだ」

「何で会社の番号を……」

「ミルキー電波で調べたんだろう。ミルキービームも出すかもしれない」

えええ……………。

「そんな訳でだ。次の七夕の夜。お前自身の決断に任せようと思う。ここに残るか、星へ帰るのか……」

……決まっている。

「ここに残る」

迷いは、ない。

訳のわからん星になんて、興味は、ない!! ……と、思う。

《第3話へ続く》

第3話

それから。

七夕の三日前と迫ったある日。学校の教室で友達と休み時間にしゃべっていると、全然知らない女子に呼び出された。

「高田守生くん。ちょっと」

教室の入り口から、長いストレートヘアでヘアバンドをした、線の細そうな女子が僕を呼びかけ手で招く。僕は一緒に居た友達に少し冷やかされながら、女子の方へ行った。「ここじゃ、何だから。屋上まで来て」

僕はドキドキしながら、先行く女子の後を追った。

「私、天川祥子。B組よ。よろしく、高田くん」

僕はE組だった。別棟で教室が遠いし、お互い目立つタイプでもないから知らなくて当然だろう。

「実はね。高田くん」

僕は、天川さんの目を見た。真剣で、透き通った瞳。

「私……」

ドキドキ。……告白される？ ドキドキ。

「実は……」

もったいぶらないでくれ。ドキドキ。

「ミルキーウェイ星人なの」

ドキドキド……「ええっ？」

そこに愛は無かった。ただ、己の身の告白のみ。

「一体、ど・お・い・う事なんでしようか？ ……」

僕は、なぜだか こみ上げてきそうな怒りを おさえて聞いた。別に天川さんが悪い訳ではないんだけど。七夕の日まで「ミルキー」という言葉に どうやら敏感になりそうだ。

「私も あなたと同じ、ミルキー星人だという事よ。そしてそれは、今この地球上にいるミルキー星人たちの間ではトップニュース」

「何だつてえっ!？」

僕は つい大声を出してしまった。一体、どれだけのミルキー星人が地球にいるってんだ!？」

「あなたが生き別れた ご両親と再会するって。有名よ？知らないの？」

「……知るかよ……。」

「まあいいわ。とにかく、お願いがあるんだけど」

「お願い？」

「私を、ミルキー星に帰してほしいの。こんな星、どうなったっていいわ。ゴミは多いし、空気は汚いし。人間も うざったい。故郷へ帰りたいの。そう、頼んでくれないかしら」

「……この目の前の美女は、なかなかの毒を吐く。」

《第4話へ続く》

第4話

そして、あつという間に当日が来てしまった。すなわち、7月7日。七夕。僕は背犬川の川原に来た。もうすぐ日が沈む。

僕は ただ ぼうつと、その沈みかけた日を見ていた。川原のところどころでは、ポテチの袋や飲料水のペットボトル、タバコの吸殻などのゴミが捨ててあった。

……なるほど、こんなものを見ていたら嫌になってくる。……地球まで捨てたくなるのか？

物思いに ふけてっていると、背後から天川祥子が現れた。「笹団子買ってきたの。食べない？」

美女と団子。

「……いただきます。ありがとう」

僕と天川さんは団子を食べながら、少し川原を歩いた。天川さんは短めのジーンズに、黒いネコのプリントされた白地のTシャツ。そしてサンダルだ。私服の同級生の女子、というものを見る機会があまり無いので、ドキドキする。

「天川さんは どうして地球に来たの」

僕は今日まで思っていた事を聞いてみた。団子をモグモグさせながら「ひゃあね」と、そっけなく答えた。

「たぶん、宇宙戦争か何かのドサクサに紛れたんでないの。今、一緒に住んでいる おばあちゃんが言っていたけど。……おばあちゃん は地球人よ。あなたと境遇は同じね」

「……でも、君は地球を去りたいんだ？」

すると、天川さんは食べかけの団子を全部 口に入れ、飲み込ん

でから少し落ち込んだ。

「……できれば、おばあちゃんも連れて行きたいんだけど。年が年だから。おばあちゃんは昔、とつても苦労した人だから。私と出会っただけ……」

……そして、黙って うつぶいてしまった。天川さんには天川さんの思いと理由があるのだろう。僕は それ以上聞くつもりは無かった。

「あ、一番星」

天川さんが空で見つけた。

「そういえば七夕ね。短冊書いて笹飾った？」

僕は昨夜の両親を思い出していた。思い出しながら、天川さんに暴露する。

「どこから持ってきたのか知らないけど、やけに でかい笹を山から取ってきて、『七夕セット』で飾りつけてお願い事を酔っ払いながら書きまくっていたね。「部長に なれますように」とか「トが せめて二等で いいから当たりますように」とか「巨乳でなくていいから豊乳」とか、控えめに欲望丸出しな願い事ばかり書いていたよ。はははははは」

どうせなら社長を目指せよ。何だか情けない……そう思った。

「暇だね……。ゴミ拾いでしょっか」

天川さんは、そばのクシャクシャに丸められていたスーパーの袋を拾い上げた。

自然と、僕と天川さんのゴミ集めが始まった。その途中、天川さんはポツリと言った。「……きれいな星なんて、ないのかもしれない」

そろそろ、日が沈んで暗くなってきた頃。ゴミ袋は増えるに増え

てそこそこ山積みになった。僕と天川さんの歩いた所だけは、きれいになった。放置自転車とかは、どうしようもないけど。「じゃあそろそろ……」と言いかけて、「じゃ、なかった。帰りそうだった」と、自分にチョップした。「いつ来るのかしら。ミルキーウェイ星人」

なかば まだ信じられないのだが。本当に来るのだろうか……。「きつと来る」。きつと来る。……天川さんは そう歌いながら、川の水で手を洗っている。

……気のせいかな？ 辺りに人が少しずつ……増えてきたような気がした。

「天川さん、気づいてる？」

僕はコツソリ天川さんに聞いた。

「……まあね。ちょっと変だな、って……。私も思ったトコ」

天川さんの長い黒髪が僕の肩に触れた。少し いい香りがして、僕の心臓がピヨンと跳ね上がった。

「犬の散歩の人とか、ジヨギングしてる おじいちゃんばかりだと思っていたけど……。そう見せかけて、この人たち、もしかして……」

天川さんが振り返って僕の顔を見るが、見るなり眉を ひそめた。

「聞いているの？ 高田くん！」

「えっ……。あ、うん。聞いているよ！」

僕はハツとして天川さんを見た。

「ボケつとしないですよ！ この人たち、みんなミルキー星人だわ！」
「ええっ！？」

僕は後ろを振り返った。すると、ちょうど後ろにいた背の高い黒いTシャツの高校生くらいの男と目が合った。

（しまった！ つい振り向いて……）

そう思っても もう遅い。バツチリ見つめ合ってしまった。

彼も……！？

僕は体が動かなかった。

《第5話へ続く》

第5話

意外にも。

その男の方から、話しかけてきた！

「やあ。君が高田くん？ お迎えが来るそうだね。おめでとう」

片手を上げて、ニツコリと笑いかけた。見た目は普通の人間と変わりないが……。 「ぞくぞくと、集まってきたようだね？ 我が同士が、ここに」

「どうして！？ みんな、何が目的なの！？」

天川さんが間に割って入った。男はニヤツと笑って答える。

「君と同じじゃないかな？ みんな星からの迎えを待っていた。彼の船に便乗させてもらおうってね。理由は おのおののだろうけど」

……いいつ……！？

ここにいる人、全員っ！？

一人、二人、三人、……十人、二十人、……一体、何人いるんだ
ミルキーウェイ星人。

「何らかの理由で、故郷に帰りたい連中さ」

「あなたも？」

「まあ……ね。いろいろと」

男は そう言って またどこかへ去ってしまった。

「思っていた以上に盛大な祭りになってしまいそうね。みんな、一体どれだけ遠くから はるばる来たのかしら……」

天川さんが男の去る背を見ながら そう言ったので、僕は何だか

焦って「ブ、ブラジルとかっ？」と、適当なことを言った。

「何それ。……日本から遠いってだけでヒネリもない……。せめて北極とか、南極とか」

僕は少し小さく背を丸めた。ギャグセンスゼロで大変申し訳ない。何、焦ったんだろう？

ただ、天川さんが あの男をずっと見ていたから……。って、何だ この気持ちは。おお？

「僕は！」

声を張り上げた。

天川さんが びっくりして僕を見る。「な、何？ 急に……」

「地球に残る！ ミルキー星になんて、行かないよ。みんなは、勝手に行けばいいさ。僕は……」

昨日の両親の行動を思い浮かべた。

短冊。願い。

「お金持ちになりますように」「『ドラ エ21』が欲しい」「健康第一」

そんな願い事を僕は書いた。親からは平凡だの安易だの、ジジくさいだの、ミルキーはママの味というよりは砂糖の味だのと言われたが。

僕の本当の願いは。

「今のままでいいんだ。地球在住のままで」

天川さんは何も言わなかった。すっかり空が暗くなって、夜風が天川さんの髪を きれいに なびかせていた。

.....

.....空に一筋の光が出現した。サツと上空を見上げると、川の中
心の上で白いシンプルな円盤がフラフラと飛んでいた。一筋の光は、
周囲をさまよう。まるで何か探し物をしているかのようだ。
きつと.....。

「たぶん、僕を探しているんだね」

僕は そっちへ向かって川の中へ入っていった。ザブ、ザブ.....。

川底は とても浅い。簡単に進める。僕は円盤の近くまで進んだ。
近くまで行くと、円盤は家の屋根ぐらいの大きさだと分かる。薄
っぺらいけど。

その一筋の光が、やがて僕に当たった所で止まった。

.....しばらくの沈黙の後、円盤の中？ から、マイク越しのよう
な声が聞こえた。

『ホップルポップルカヌマカスンニデニジョジョルナ、ですね？』

.....はい？

『あなたの本名です。正式名称は.....』

僕は言葉を止めに かった。

「いえっ、名前は もう、結構ですっ。守生でっ」

正式名称なんて、覚えられそうにない気がする。

「僕は星へは行きません。断るために、ここで待っていました」

「……なぜ？」

「ここが僕の育った故郷だから……」。

僕の故郷はここだけです」

「……」

「……ごめんなさい」

「……」

シーン……。

虫の音さえ聞こえなくなるほどの沈黙。辺りが、静寂に包まれた。

でも、やがて。

「……わかりました。ポポン」

ポポン……？

「ポポンは、守生として、地球人として、ここに残る決意をしたのですね」

ポポンが、僕の正式名称らしい……。

「よくわかりました。立派になりましたね。母は……今、ここに
いる父も……、しかと、あなたの立派に成長した姿を目にしました。
さっそく帰ってブログに書かなくては」

……。えーっと……。

『とても辛いですが……。もう、ここに来て守生を困らせることもないでしょう。私達は このまま去ります。……。お元気で。守生』

円盤は、そのままスウ……。ツと、上空へ。風が当たる。『最後に……。あなたの願い事を叶えましょう。守生。言って ご覧なさい』

優しい声。僕はピンツと、ひとつ。思いついたことを口にした。

「ここにいるミルキー星人の みんなを、星に帰らせてくれるってこと、できますか？」

周囲にいたミルキー星人（？）たちが、どよどよと騒ぎ出した。中には、「ナイスだぜっ、ぼうずっ」と声を上げる人もいた。

ちらりと、天川さんの方を見た。天川さんは、少し複雑そうな表情をしていた。

……。天川さんは行ってしまふのだろうか？
そう考えると、少し胸が切ない……。

《第6話へ続く》

第6話

天川さんは、天川さんの行きたいところへ。

僕は……ここに。

それでいいんだ。

少し、僕は目を閉じた。そして、もう一度。円盤の方へ目を向けた。

返答は……。

『……人数 多すぎ。 無理 ！！』

……。

……。

……そのまま星のように消えていった。キラーン。

いつの間にか雲のすき間から、天の川が見え出していた。

次の日。朝、目が覚めてベッドから机の上を見ると、なんと来週に発売予定のはずのゲーム、『ドラ エ21』が ちよこんと置いてあった。

何故。

その後、朝食を食卓で とっていると、血相を変えた母がバタバ

夕と玄関から やって来た。

「じ、じじじじじ……！！」

にわとり？

「こここれがつっ、これが郵便受けにつっ」

母が抱えていたのはA4の茶封筒。中身が、ふっくらと厚みがある、重いつて、重い？

開けてみると、福沢 吉 先生のお顔が たくさん……札だっ
！！

総額、250万円。

何故っ！！

次の日……。

学校に登校すると、廊下で天川さんが待っていた。

「お金持ちに なったんですね。おめでとう」

「……やっぱり、僕の願い事を叶えてくれたのかなあ……。何か、無茶苦茶だったけど……」

僕は あと、短冊に「健康第一」と書いたが……たぶん叶えられて、例え体のどこかにガンがあったとしても完治されているんだろう。

「実はさ。私。ミルキー星に行く気、なくしてたんだ」

「えっ？」

天川さんが突然、恥ずかしそうに言った。

「……高田くんがさ、本名ホップルポップルカヌマカスンデ」

ジヨジヨルナだって聞いた時。もし私の本名が シヨシヨトツタラチーノドリスカトリアンヌルージユですって言われたら。それは嫌だなんて、考えたの」

「……そこですか？ 行く気無くした理由。

すごいですね……よくまあ、そんな長いカタカナを一度で……。尊敬。」

「……嘘。」

「僕の故郷はここだけ」

「……そう聞いたから」

天川さんは微笑んだ。
ドキン。

「確かに そうだなんて、思い直したの。もし私が居なくなったら、おばあちゃんは何て思うだろうって。私が育ったのは ここ、地球で。おばあちゃんが親。私は……地球人で、いいんだわ」

窓から、天川さんは外の どこか遠くを見ていた。

彼女を たっぷりと日射攻撃する光。肌荒れしたら、どうしようか？

そして、そよそよと吹く風。彼女は、気持ちよさげだった。

「……それだけ。またね。高田くん」

天川さんは そう言って、今まで見た事のない極上の笑顔を見せて 長く続く廊下を走って行った。

……うわぁ……。

僕は、どえらいものを見てしまった。

ポリポリと前髪あたりをかきながら赤面して、激しく後悔する。

何故、短冊に『恋が絶対 確実に実りますように』と書かなかつ

たのか、と……。

《第7話へ続く?》

第7話（おまけ）（前書き）

本編のおまけ……後日談です。

第7話（おまけ）

あの、天川さんの極上の笑顔を見てしまった日から、しばらく。

僕……高田守生は、別棟にあるB組の教室の前を通りがかる事が多くなった。何かと理由をつけては、B組の前を通る。

ある日は、トイレに行くのに たまには違う所だと。

ある日は、職員室に行くのに たまには気分を変えて別コースでと。

ある日は、はたまた何か見えない力が働いて、僕という人間を引き寄せる魅惑の廊下が、とか。

……理由なんて何でもよかった。ただ、B組の前を通りたかっただけ……。

ひょっとしたら、会えるかも しれなくて。

天川さんに。

天川祥子。長い黒い真っ直ぐな髪。時々、ヘアバンドで前髪を上げている。独特のイイ香りがする。意志のこもったような力強い瞳も印象的だ。

最初、何も思わなかった。……好きに、なるなんて。

僕といえば、何の取り柄もない普通で地味な中学二年生。好きな事といえば、耳掃除。あと、かろつじて写真や絵を見るのが好きかな。だから写真部。

非常にパツとしない性格や人物で申し訳ないんだけど、どうでしょうか？ 美人の天川さん。

会いたいなあ……………。

とか何とか言ってる間に。明日から夏休み突入です。…………シヨボン。

終業式も終わり、教室で最後の荷物をまとめた後。さあこれから家に帰るか。それとも寄り道でもして帰ろうぜ的な事を友達数人と話していた時。僕が教室から廊下へ第一歩を踏み出した途端。いきなり目まいがした。

それは、とても立ってはいられないほど。強かった。

一体どうしたんだ??

「守生！ おいつ！」 「高田つ、大丈夫かつ!？」 「友達の大声がした。」

しかし、それよりも近くで…………。

『8月8日。午前2時48分。空き缶を持って外へ』

と、一番近く耳元で声が聞こえた。どこにでも聞く、女子アナ口調の声だった。

8月8日、午前2時48分…………?

空き缶を…………???

何のこっちゃだ…………僕の視界から、景色が消えていった。

一つ、嬉しい事を思い出した。
僕と、天川さんだけの秘密の共通点。

僕らは、「ミルキーウェイ星人」だったって事。

次に……目を覚ますと、学校の保健室だった。周りはもの凄く静まり返っていた。さつきまであれだけ騒がしい教室の中にいたから、余計にそう思えてしまう。夏休みが目前。遊び盛りの僕たちにとっては、はしゃぎ出して当然だ。うるさい先生たちもいなし、時間に縛られなくてもいい。僕らは自由だ！……そんな解放感もしくは快方感で いっぱいだった。

僕が目を覚ましてベッドから下りようとする、その気配に気づいた保健室の先生が やって来て声をかけた。

「もうイける〜ん、かしらラ？」

……一瞬、言語が通じなかった。たぶん、「もうイける（大丈夫）なのかしら？」と言ってるんだと思う。なので、「はい。大丈夫です」と何事も無かったかのように答えた。

僕の目の前のカーテンが開く。登場したのは、縦巻きカールなパーマのミニスカ女医……もとい、白衣の美人な先生だった。

「アラそおん？ 良かったわ〜。親御さんに連絡しても繋がらなくってえ〜。まあいいわ。先生が送っていつてあげるわねっ」

やけにハイテンションな先生だ。せっかく送ってくれるというが、ちよつと遠慮したい。

「いえ、あの……。自転車で来てるんで。明日から休みだし。体は

もう大丈夫なんで、押して帰ります」

「アラそう？ 本当に大丈夫？ 先生、嘘はキライよ？」

僕も基本的に嘘は好きではありませんが……。

「本当に大丈夫です。本当に」

僕は お礼を言つて、ちゃんと真つ直ぐ歩いて保健室を出た。きつと夏バテか何かだろう。たいした事なさそうだ。

「高田くん！」

廊下を静かに歩いていると、背後から覚えのある声があった。最初、ちよつと信じられなかった。……でも、すぐに信じた。

振り返ると、ずっと願っていた あの人が こっちに向かって駆けてくる。

夢でないのか！

「天川さん！」

今日はヘアバンドをしていない。どころか、後ろ髪を上に向けてポニーテールにしている。パタパタと、制服姿の天川さんが僕の顔を見ながら近づいてきた。

天川さん真夏バージョン！！

僕と至近距離まで近づいたあと、「ああ会えてよかった！」と息を整えた。

「どうして」

「聞いたでしょ！ ミルキー通信……！」

ミルキー通信??

「空き缶持つて、8月8日に集まれつて！」

……僕を襲つた謎のメッセージの正体は、ミルキー通信だった……

…らしい。もしや以前、父が言っていたミルクィ電波というやつがコレ？

まあいいや。ともかく。

天川さんの所にも、僕の所に来たものと同じメッセージが来たのだ。

8月8日、午前2時48分。……空き缶？ を持って外へ、と。

「一体、何なんだろうね？」

と、僕は どぎまぎしながら天川さんの横で自転車を押しながら帰り道を歩いていた。

「さあ……。当日になってみないと」

「……だよなあ。この前のは僕の両親が発信源だったわけだし……。今回は、誰なんだろう……」

「あー 謎だらけ。何かヒントがないかなー」

天川さんは重いタメ息をついた。僕は話題を変えようかなあと思っ、少し周囲を見渡した。すると、ちょうど商店街の電気屋の前を通りがかり、ついていたテレビ画面に目が とまった。

『来たる！ ドントコマイ座流星群』

一面の星空の映像が映し出された。

僕が足を止めて そちらに釘付けになっていると、天川さんも注目した。

『流星群 ピークは8月8日の午前2時頃』

と、テロップが流された瞬間。

「あー!!」

と、僕たち同時に声を上げた。

間違いない。コレ、絶対に関係ある！！

そう確信して、僕と天川さんは お互いに 頷きあった。

そして、それから夏休みに突入し、とくに部活動の登校日も無ければコレといって予定も無い僕は、毎日ノンビリと宿題を やったり 家族で ちょっとどこかの花火大会に出かけたり。友達と遊んだりして過ごした。

その間、悲しい事に天川さんとバツタリ偶然出くわすなんて奇跡も無かった。

そりゃそうだろう。

天川さんは夏休みの間ずっと……… どういうツテか渡米すると言っていたから。

夏休みの間、僕は日本で、天川さんはアメリカ。

僕は内心アセった。何だか天川さんに置いていかれてしまうような。

このままじゃいけない。僕も夏休みの間に、何かしなくちゃ。英会話、映画鑑賞、料理、マリンスポーツ、パソコン、ダンスにヨガ……。 お金の無い僕にできそうな事って……。

……とりあえず、玉ねぎの観察を始めてみた。ちょうど手ごろな玉ねぎがあったので。放っておくと、ネギみたいなのが生えてくる。

……後は知らない。いつの間にか、母さんに捨てられた。

来たる8月8日の夜。まだ日付が変わったばかり頃。

僕は そつと家を抜け出して、背犬川へ出かけた。もちろん、空になった缶を一つ持つて。まだ、2時までには時間がある。

これから、一体何が起きるのだろうか。

ミルキーウェイ星人だけの、特別な時間。僕は空を見上げた。

星が きれいだ。空は きれいだ。

「天川さん……きつと見てる」

同じ星空を。空は、国境を越えるはず。

「やあ。また会えたね。守生くん」

横で、覚えのある声がした。暗がりだが、雰囲気だけで すぐに 思い出した。前にもココで天川さんとも会った。あの、高校生くらいの男だ。

顔は結構イケてる。ただ、何か策略でも持っていていそうな、抜け目のない性格の持ち主といった匂いがする。

あまり関わりたくない部類なのだが……。

「今日は一人？ 彼女は？」

「いません」

僕が そう答えると、男はオヤオヤとペロつと舌を出した。

「紹介しとくよ。僕の名前は知らなかったよね？ 由高寿也^{ゆたかとしや}」

と、勝手に自己紹介を始めた。別に知るつもりなかったんだけど…

…。

「何で空き缶だと思う？ ビンでもペットボトルでもなくて。缶

カン」

と、由高という男。彼が妙な事を ふっかけてきた。「知らない」

やがて男は「八八二カンシャ。8月8日2時カン48分（882カン48）。……ただのこじつけと語呂合わせ。どう？」
と、人差し指を立てて言った。

……無理があるのでは？ ……。

すると横の方からパツと、懐中電灯の明かりが出現した。見ると、その明かりが僕たちを照らす。

「こんばんは。素敵な夜ね」

髪を左右高く上げた、ハジけてそうな女の人だった。高校生なんだろうか？ 中身が中学生くらいに見えるんだけど。

「真木^{まき}。来たのか。オーストラリアにいるのかと思っていたのにと、由高という男……。彼が返事をした。

この二人、知り合いか？

「こつちに帰って来てたの。……変わらない。よかった」

「真木……」

と、何だか雰囲気……。僕が、場違いな気がしてきた。この二人、まるで生き別れた恋人同士？ のような。

とりあえず離れよう。

僕は「じゃ……」と、そつとその場を離れた。

背後にいる二人を感じながら、僕は……うらやましいと、思った。

天川さんに会いたい。きっと同じ空と星を、見ているはずなのに。

なんで手が届かないのだろう。

「あっ」

キラリ、と。一筋の線が目の前を横切った。流星だ。

ニュースで言っていた、ドントコマイ流星群のピークは もうそろそろなんだ。晴天だし、観測条件は良好だ。ずっと眺めていたら、必ず一個は見つけられるだろう。

もう午前2時を まわっている。もうすぐだ。

八八二カンシャ？

何の こつちゃ。

僕は腕時計をチラチラと見ながら、空き缶を片手に、48分を待った……。

46、47、そして、48分……。

その時が来た。

「流れ星……」

また、流れ星が来たと……思ったのに。違う。

あれは！

「こつちに向かって来る！」

なんと、空に突然 現れた光が、やがて大きく広がってきたかと思つと、それは！

僕に向かって落ちてきた光だった！

「うわああああああああああああっ……！」

ドカンッ！！??
ドゴンッ！！?? …… かもしれない。

目の前が光で、何も見えなくなった……音さえも、衝撃過ぎて何も聞こえなかった。

……

……

「もしも……。少年。生きてるか？ ……死んでないよな」

ペタペタと、頬を叩かれた。おかげで、僕は目を覚ます。ハッと気がついて、ガバッと上体を起こした。僕は気絶していたのか！

「あ、元気だ。良かったな。きつと さっきの贈り物が強烈過ぎたんだろ」

声の主は由高……さん。その隣に真木、さん。

「贈り物……?」

「ホレ。お前のだぞ」

と、ヒョイと渡されたのは。僕が持って来た空き缶……。 「ん？」

何かが入っている。

カラカラと……微かな音がした。

小石か？ ……僕は、自分の手のひらの上に「それ」を取り出したみた。キラキラと……。コロコロと……。トゲトゲの、小さな粒。こんぺいとうが、一粒だった。

「空からの贈り物だ。ただのお菓子だから、安心して食っちゃえ」
「何で空からこんぺいとうが……。贈り物って、誰からの」

僕の頭の中は疑問で いっぱいだつた。なぜ、誰が。何のために。
「七夕の話は知っているだろ。ナマケ者の若者たちの話」
「……って、織姫おりひめと彦星ひこぼしの話？ それは何」

《作者が聞いた話》……

織姫は天帝の娘で 機織の上手な働き者の娘であつた。牛飼いの彦星（牽牛）もまた働き者であつた。

天帝は二人の結婚を認めた。めでたく夫婦となつたが夫婦生活が楽しく、織姫は機を織らなくなり彦星は牛を追わなくなった。このため天帝は怒り、2人を天の川を隔てて引き離した。

しかし年に一度だけ……7月7日だけ、会うことを許されたのだつた。

二人は嬉しくて嬉しくて、その超幸せパワーで地上の人々の短冊の願いを叶えてくれる。

……たぶん。

「最後、その二人が嬉しさのあまり、関係なく人々の願い事を叶えていったんだよな」

ああ……。確か そんな終わりだつた。

よく考えたら、二人の力つてすごい。

「同じ事。ミルキー星人に何か嬉しい事があると、こうやって喜びは分け与えられる。何があつたかは知らないが、おおかた長年の決着がついた、とかな」

長年の決着？

「何の?」「戦争とか」「せんっ……」

思い出したけど……僕が　そもそも　ここに来たのは、戦争がらみではなかったか。

「知らんけどな。ま、あんま深く考えるな。どうせ　ここからじゃミルキー星は見えない」

見えないのか。遠すぎて……。

「じゃあな。早くミルキー電波に慣れるよ」

由高さんは立って、アツサリと　その場からスタスタと歩き出した。真木さんを連れて。

真木さんは、去る前にニッコリ笑って教えてくれた。

「その　こんぺいとう、食べて願い事してごらん。願いによっちゃ、叶うかも。ミルキー電波に慣れてくれば、あたしたちみたいにミルキー星人の事が　よく分かってくるよ」

そういうもんなんですか……。電波通信?　メルマガ感覚でしょうか?

「ハハニカンシャ、って……。どういう意味なんだろう……」

僕が　ふっと思いついて呟くと、真木さんは　あっけらかんと答えた。

「寿也がテキトーな事言っただけよ。気にしちゃダメ。損だから」と、言いながら真木さんは自分の缶に入っていた　こんぺいとうを取り出して、食べた。

カリッと、軽い音がした。

「また会おうね。同士」

……さて。残された、僕。一粒、カリッと口の中で。こんぺいと
うが弾けた。

願う事が、一つだけ……。

天川さん……帰ってきてほしい。会いたい……。

……ずっと、こんな調子。僕は、いつも願ってばかりで……。

そんな風に、こんぺいとうの甘さが口の中いっぱい広がって、
嘆いていると。

「高田くん……」

微かに、声が聞こえた。ほんの、微かな。でも、僕には ちゃん
と聞こえた。

ボウツと、まるでユーレイなんでないかと思ったりした。けど、
人の形は見える。それは幻なんかじゃない。

川の向こう側。ちょうど川を挟んで対向側に。彼女が いた。

ただ下ろしただけの髪、夜に映える白いノースリーブのワンピース。
よく似合う。

今、アメリカにいるはずの、天川さん。……なぜ、ここに？

「天川……さん？」

「すごい。海越えちゃった！ 高田くんの力なの？」

僕の力？

「天川さんは……本物、なの？」僕は川の中を歩いた。

川は浅い。ザブザブ、ザブザブ……。

「本物よお。……私は！ そっちこそ！」

やがて、天川さんの元に辿り着いた。

肌が すごく白い。夜のせいで ますます白い。

触っても、いいだろうか？ ……と思う前に、自然と目が合った。

チヨン、と軽く天川さんの腕を つつく。

固い物に触れた。腕。確かに存在している。

天川さんが ここに。

確かめる事が できた。

「それじゃ私はワープして、アメリカから君の元に居るわけだ」と、天川さんはニッコリ笑った。

可愛い。すごく可愛い。どうしよう。

「天川さん。すごく話したい事が あるんだ。」

緊張が走る。物凄く大きな爆弾を抱えているようだ。

僕の今 置かれている状況。赤と青のコードの どちらかを切れば爆発が止まるんでない。目の前にスイッチがあって、そのスイッチを押すのか押さないのか どうなんだ？ といった所。

「何？」

ギクツ。

心臓に、天川さんの声が刺さる。

「僕は……」

告白する（スイッチを押す）のか。

「ずっと、君の事が……」

ゴマかす（スイッチを押さない）のか。

ドクンドクンドクンドクン。

告白する（攻める）のか。

やり過ぎす（かわす）のか。

どっち!!

「言わないで！」

「！」

思いがけない事態。爆弾が先に止まってしまった。

「今は……言わないで。だってこのまま、私アメリカに戻る。きっと。でもそこに、高田くんは いない。そんなの嫌！ だってそうでしょう？」

「えっ、えーっと……。うん。まあ、そう……。かな？」

僕はウロたえるまま。必死に身を乗り出して訴える天川さんを見て、オヤ？ と思った。

え？ あれ？

「まったくもう……。やんなっちゃう。8月は、日本に居たかったのに」

えーっと……。

「私が帰国するまで、続きは保留よ？ 分かった!？」

「は、はいっ」

すごい権力だ。

「うわぁー……こっちは星がキレイね」

そして、いきなり話が変わる。

……そうか。日本とアメリカじゃ時差がある。それをたった今
思い出した。

「うん。今、天川さんと見れてよかったよ」

「きつと この広い宇宙の どこかで。ミルキーウェイ星人の誰か
が……。何か嬉しい事があった、お祝いに、私たちに喜びを くれ
たのかもしれない。私そう思う」

さつきも そんな話をしていたな……。

「あれっ……、天川さん………」

さつきまで そこに居た天川さんの姿は無かった。きつとアメリカ
に戻ったのだろう。

あたりは真つ暗で、水面に映る星々が宝石のようだった。僕は宝
石を拾いたくなくなった。

数日後。学校の登校日が あった。

朝の登校中 歩道を歩いていると、並んで一台の軽自動車か や
つて来た。カーウインドウを下げ、窓から僕を呼ぶ。

「高田守生くん。お加減は どう?」

グラサンをしていたが、保健の先生だった。こうしてみると、普

通の美人女医なのだが……。

「はあ。もう大丈夫で……。」

「ミルキー電波には もう慣れたかしらぁン？」
と、ぶつ飛んだ事を聞かれた。

「……！……何故それを……！？」

「簡単な事よ？ 私もミルキー星人。アロハツ」

アロハは関係ない。「どうして知って……いや、先生は なんでここに？」

「君がミルキー星人だって事は ミルキー内では もう周知の事実な・の！ インターネットみたいなものね。みんな繋がっている。それより、こんぺいとうは おいしかつたかしら？」

「あれに ついて何か知っているんですか？」

「アラ。だってアレは私がバラまいたんだもの」

「……。……えええええつつ！？」

驚いてばかりだ。

「この前、妹が出産でねー。生命の誕生と その神秘について深く感動したわけよ！ つい嬉しくつて。調べたら、こんぺいとうを空から まいてくれる業者が 居たから、つい12ケース注文しちゃった ミルキーウエイ便オリジナル夏イベント！ 今なら30%オフ！ ～早い者勝ちだよ人生は～ ……つてトコ。ネット注文だと、さらにポイント割引が つくから……。」

……ベラベラと……先生の口が止まらないので後は省略させていただきます。

要するに、今回のイベントの仕掛け人は先生……。

「じゃにー。頑張れよ少年！」

ブオオオオオ……。車は去って行った。

僕の周りのミルキー星人たち。見た目は人間と変わりなんてない。むしろ、何が違ってたんだらうか？

「高田くーん!!!」

元気よく、僕の、はるか向こうから坂道を、駆けてやってくる。ああ、帰ってきたんだ。僕の、好きな女の子。

さあ、学校へ行かなくちゃ。

《END》

第7話(おまけ)(後書き)

【あとがき】

いかがでしたでしょうか？

銀河！ いいですね〜夢のリングをむきたくなります(古……)。

ご意見・ご感想などありましたら、お願いします。

本作品は、読者様のご指摘により修正をしています。(H19
11.5)

「白い銀河に謎の宇宙2 - 惑星シャンプー効用編 -」あります。
連載中です。

<http://ncode.syosetu.com/n44440d/novel.html>

(URLはお手数ですがコピペなどしてお進み下さい)

こちらとは違った物語になって進んでいます。よろしければ訪問
してやって下さい。

ありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4046c/>

白い銀河に謎の宇宙

2008年9月8日13時15分発行